

[ ] 長文内容一致・語彙

A. 選択肢 9つのうち、本文の内容に合うものを3つ選択。

- a. ほとんど全ての共同体で、子供たちはできる限り大人の影響を受けないで育ててほしいと思われている。  
第1段落最終文に矛盾している。
- b. いくつかの研究によって、子供たちが大人に混じって共同体活動に参加する時期が早ければ早いほど、子供らしい純粋さを失うのが早まることが判明した。  
「子供らしい純粋さ」について記述なし。
- c. 子供たちが自由に大人たちと交わることが認められている所でさえ、子供たちが夜両親の寝室に入ることは認められていない。  
第3段落最終文に矛盾している。
- d. イタリアの中流家庭の赤ちゃんと比べて、欧米の中流家庭の赤ちゃんが他の人と一緒にいる機会は少ない。  
counterpart: 相当するもの      ここでは“middle-class babies”に相当するもの。  
第4段落2文目後半と一致している。
- e. アメリカの中流家庭の子供たちは、自分の親が実際に経済活動を行うところを目にする機会が少ない。  
第6段落4文目と一致している。
- f. アメリカでは、中流家庭の大人の職場は子供たちが働く親たちを見ることができないように設計されている。  
第6段落4文目では“The structure of middle-class U. S. adults’ days”「中流階級のアメリカ人の大人の日中の構造」つまり、「大人の日中の過ごし方」が話題になっているが、「職場」については触れられていない。
- g. 輸送手段が利用できない一部の地域では、子供たちはお使いをするのに徒歩で行かなければならない。  
第7段落2文目に「子供たちがお使いでお店まで走る」ことが書いてあるが、輸送手段については一切触れられていない。
- h. アフリカ西部では、子供たちが様々な仕事をして稼ぐわずかなお金は、家族の生活に役立つよう期待されている。  
第8段落の内容に一致する。
- i. 共同体生活への子供たちの参加について研究している学者によって導き出された結論は、子供が参加する年齢がますます幼くなっているということである。  
「子供が参加する年齢」は一部述べられているが、これは文化ごとの比較。時系列での比較ではないので、「ますます」という表現は当たらない。

B. 本文中の下線を施された語句の同意表現を選択。

- (あ) taken for granted      take O for granted : O を当然のことと思う の過去分詞形  
d 当然のこととして受け入れられる  
a 役に立つものとして保護される      b 不必要とみなされる      c 有害なものとして拒否される
- (い) visible      本来は「目に見える」という意味。本文では「子供の姿が目に残る」という意。  
a 目につきやすい  
b 見る能力がある      c 見るのがうまい      d 見る価値がある
- (う) これは単語の知識というよりも、「代入できる」選択肢を選ぶ、というとき方のほうがよさそう。  
a かわるがわる、交替で  
b 選んで      c 義務で      d 好もうと好むまいと
- (え) game      意外な意味で使われている。ここでの“game”は「猟の獲物(の肉)」の意味。  
ただしこれも(う)と同様、[単語知識として持っている]人はごくわずかでしょう。  
本文は“~, Aka mothers and fathers in Central Africa hunt, butcher, and share game while ~”となっている。  
“hunt, butcher, and share”の共通の目的語になっている。“butcher”って何だ? ってのがわからなくても、「狩をして分かち合うもの」を選択肢から探せばよろし。  
  
ちなみに、2006年度 首都大学東京の入試問題でもこの意味で“game”が使っている部分がある。記述問題が出題されている。  
  
d 食用の野生哺乳類や野鳥  
a 共同の娯楽      b 余暇の活動      c 農作物の生産
- (お) socialization      語尾に -ize がつくると「~化する」という動詞、さらに -ation がつくると名詞に変えた目印。なのでこの語は「社会化」。  
例    computer                  computerize                  computerization  
         コンピュータ                  コンピュータ化する                  コンピュータ化  
inform や communicate が information だとか communication にかわるのもそう。  
d 子供たちが自分の属する社会で受け入れられるようなやり方でふるまい方を身につけていく過程  
本文の下線部(お)の直後に「つまり子供が自分の役割と技術を身につける過程」と書いてある。  
a ある共同体に属する一人ずつが同等に扱われるはずのしくみ  
b 小規模な共同体が大規模なものになる過程  
c 子供たちが友達の作り方を身につける過程

様々な文化的共同体での子供たちの生活におけるもっとも影響力を持つ項目の一つに、どの程度子供たちが大人の活動に参加し、観察することが許されるか、というものがある。<sup>A-a</sup> 子供たちを大人の共同体活動から引き離しておくことは中流階級では当然のこととされているのだが、ほかの多くの共同体では珍しいことなのである。

実際に進行する大人の活動に子供たちが参加する機会の差異は、子育てに関するその他多くの文化的相違と密接に関わっている。子供が共同体に参加する範囲と参加を認められない範囲の差異は、それぞれの文化での調和についてのある捉えかたの中心に据えられるものである。そこで、幼い時期に大人の共同体活動を観察し、参加し始めることを通じて子供たちが学ぶ機会の共同体ごとの違いを見てみることにする。

一部の共同体では、子供たちは幼い時期から、昼夜を問わずほぼ全ての共同体及び家庭の出来事に参加する。大人の世界の中で、幼い子供たちの目に触れないよう隠されている部分はほとんどない。その子供たちはたいてい、大人と一緒にいるからである。たとえばアフリカ東部では、2歳から4歳の子供たちは、ほとんどの時間を他の人たちと一緒に過ごす。地面に敷かれた牛革の上にきょうだいや異母きょうだいたちと一緒に座って、年上の家族のすることを眺めていることがよくあるのだ。カイロの都市部では、子供たちは完全に共同体の一員とみなされており、昼夜を問わずどんな時間帯でもたいへん目につく。コンゴ民主共和国に住むエフェ族の幼児は保護区内のどこにでも行くことができるが、そこには行われていることを隠すような壁は存在しない。<sup>A-c</sup> よちよち歩きの幼児たちが親と一緒に寝るところでは、子供たちは夜でも日中と同様大人たちと一緒に過ごすのである。

対照的に、欧米の中流階級の幼児は、他の人たちと分け隔てられるという、世界的、歴史的な観点からみると普通ではない状況におかれている。マサチューセッツ州の中流家庭の赤ちゃんたちは、過度に触れ合う状況と孤立する状況にかわるがわるおかれていた。<sup>A-d</sup> その一方で、イタリアの中流家庭の赤ちゃんはほかの人と一緒に過ごす機会が(マサチューセッツ州の例よりも)はるかに多かった。労働者階級のアメリカ系アメリカ人の子供たちが一人きりにされているところを目にすることはほぼない。その子供達は昼も夜も抱かれたり背負われたりしており、たいていは二人以上の人と一緒に過ごすのである。

世界中の多くの共同体では、アメリカの中流家庭の子供たちにくらべて、幼い子供は、大人たちが働くところを目にする機会をはるかに多く持つ。たとえば中央アフリカのアカ族の親たちは、自分の子供を抱きながら獲物を狩り、屠殺し、分け合う。

同様に、マヤ族の街やインドの部族共同体、そしてコンゴ民主共和国の狩猟採集共同体でも、幼い子供は日常的に大人たちが経済活動に従事する姿を目にする機会を持つ。子供たちは、大人たちが編み物をし、衣服を仕立て、家で店番をし、近所で食べ物を集めたり家を建てたりしているところや畑や工場で働いているところを見ることができるだろう。それとは対照的に、トルコだとかアメリカの一部の都市に住む中流家庭の子供たちは、仕事が家事やお使い、子供の世話に限られる親かベビーシッターと過ごすのが普通である。<sup>A-e</sup> 中流階級のアメリカ人が日中を過ごすやり方では、子供たちが自分の所属する共同体の経済・社会活動を目にし、参加することが難しいのである。

おそらく早い時期から大人の仕事を目にするということに関連して、多くの共同体の子供たちは幼い頃から家族の仕事に参加しはじめる。<sup>A-f</sup> 3歳から5歳になるまでに、ポリネシアのマラケシュの子供たちは単純な家事をこなす技術を身につけ、薪を集め、落ち葉を拾い、掃き掃除をしたり、店までお使いに行ったりするよう期待されている。彼らは他の人たちが働くのを見て、いちどやり方を覚えると自分でその仕事をするのである。

A-f アフリカ西部では、子供たちが歩き始めるときから近所のお使いに行くことがよくあり、2歳から3歳で簡単な役割を果たすのである。子供たちの役割は力量に応じて増していく。子供たちは自分の家の近隣や村で重要な役割を果たしており、自分の所属する共同体の中で役に立つ一員であることを自覚している。子供たちが稼ぐわずかな収入によって、家族の暮らしぶりに決定的な違いが生じることもよくあることなのだ。幼い子供たちは共同体の経済活動だけではなく社会活動にも参加する。子供たちはあらゆる状況に参画しているからである。子供たちは大人の世界の一部であり、「邪魔になって」はいない。そのうえ、子供が行う仕事は社会化、つまり子供が自分の役割と技術を身につける過程の核心部分を構成する、不可欠な要素なのである。

今日、中流階級の共同体では子供たちはたいてい大人の仕事や社会の世界から切り離されている。しかし、植民地時代の西欧やアメリカでは、仕事場と世帯は切り離されていないのが典型であった。子育ては血縁の有無を問わず多くの人々にかかわることであり、実際に行われている活動に参加することで学習の機会が得られた。植民地時代には、アメリカの子供たちは4歳児でさえ見事に家族の家計を支える仕事に参加していたのである。

[ ] 内容一致・空所補充・部分和訳・語彙

A. 本文の内容にあわせてリード（導入文）に続く文を選択する問題。

(i) The car which killed Mrs. Driscoll

ドリスコール夫人の死亡事故を引き起こした自動車について。

a 時速4マイルのスピードしか出してなかった。

b 水晶宮に到着するまでに4マイルもの距離を走っていた。

c 見物人に曲芸走行を披露していた。

d 実際は彼女に深刻な衝撃を与えることはなかった。 本文波線部の後ろに注目！

(ii) In the U.S., the number of deaths by road accidents

アメリカでの交通事故死者の数

c 現在1960年当時の数とさほど変わってはいない。

a 自動車の数の増加に比例して増加しつつある

\*in proportion to ~ : ~ に比例して

b 自動車の数の増加に比例して減少しつつある

d 現在では自動車の台数の3.5倍である

B. 空所補充問題。

(イ) 空所の前に「そこで路上の事故で負傷したり死亡したりする人々の大多数は自動車を所有していない人たちである。」とある。セミコロン (;) があるので、空所には「自動車を所有していない人」の説明が入るはずだ。

b 彼らは歩いているまたは自転車に乗っている

a 彼らは自動車修理工である

c 彼らはバスやタクシーの乗客である

d 彼らはただ後部座席に座っているだけではない

(ロ) 空所のある文の前には「発展途上国で交通事故の犠牲者が多い」ことが書いてあり、「それとは対照的に先進国では死亡者数は減少しつつあるように思われる」と続いている。このコンマの後では、先進国の状況が語られているはずだ。

a 路上を走る自動車の台数がたいへんに増えているにもかかわらず

b 飲酒運転の件数が次第に増えているからである

c 運転できる最年少の年齢にもかかわらず

d 交通事故に対する新法が施行されるからである

この段落では自動車の台数と交通事故の発生件数が話題の中心となっている。また、これまでの段落で一切言及のない「飲酒運転」「年齢制限」「法律」がいきなり述べられることはまず考えられない。

(八) 空所の前に「逆接」の but があることに注意！当然のことながら、前に書いてあることとは反対の意味が続く。後ろには「このような突然の運転手の増加」とある。

c 狭く、整備されていない道路事情では「このような突然の運転手の増加」についていけない。

a 貧しい人々は「このような突然の運転手の増加」にただ驚いている

b 政府の地球環境政策は「このような突然の運転手の増加」に反している

d その国の道路交通法は「このような突然の運転手の増加」によく適合している

(二) 「救急車の到着」を飾る熟語の問題。

c 間に合って

a 時によって \*by the time だと「そのときまでに」だけれど、by time はちょっと…

b 時々、たまに

d 時々、時折

(ホ) 交通事故で息子を失ってしまった男性の心情を考える。

c それは私の心に埋めることのできない穴を開けてしまった

a 私はもっと注意して運転するべきだったのに

b それはたいへん容易に克服できた

d 私はその運転手にそんなにゆっくり運転しないよう頼まなければならない

C. 本文中の下線部が表す意味を選ぶ問題。

(1) it has

代名詞と代動詞の問題。

まず主語の it が指すものを考える。ここでは has で文が終わっている。

後ろに真主語になれる不定詞もなければ that 節もない。ということは前の内容、または前にある単数名詞を表している。

次に has について。「持っている」ならば後ろに目的語が必要。完了形を作る助動詞ならば過去分詞が必要。いずれにしても足りないものがある。 \* 英文の中で足りないものは必ず前にある

前の文は ‘A witness said, “This must never happen again.”’ となっているので、前にある動詞を補ってみると、it has happened. 「それ(事故)は起こってしまった」となって、前後の文との意味のつながりも出来上がる。

c 交通事故は再び起こってしまった

a その目撃者は再び口を開いた

b もう一度その衝撃は致命的だとわかった

d ドリスコール夫人はまた轢かれた

人は it ではないわな。

一度わかれば十分だろう。

最初の事故で亡くなってる…

(2) many people drive without ever having passed a test

**without Ving~** : ~しないで が使ってある。**having p.p. ~** は文の動詞(ここでは現在形 drive)よりも前の動作・状態を表す動名詞。また、**without** の後ろに **ever** がある。否定後の後ろに **ever** を置くと **never (not + ever)** になる。ということは「決してテストにパスしないで」ということになる。「多くの人々はテストに合格することもなしに運転をする」が直訳。

- b 彼らの多くは無免許の運転手である
- a 多くの人々は日本語で言ういわゆる「ペーペードライバー」である。  
「ペーペードライバー」は免許を持っていても運転しない人テストにはパスしている。
- c 多くの運転手はお亡くなりになっている \*pass away : 物故する(亡くなる)
- d 多くの人々は高校でのテストで不合格になっている

(3) we cannot help wondering whether the inventors of the motor car had any idea what they were unleashing on the world

**cannot help Ving~ = cannot but 原形 V~** : ~せざるを得ない

**unleash** : ~の束縛を解く・引き起こす

直訳は「われわれは、自動車の発明者たちは自分たちが世界に引き起こそうとしていることについて何か考慮していたのかなぁと思わずにはいられない」「あいつらホントに考えてたのか?」という選択肢を選べばよし。

- d 自動車を発明した人たちは自分たちの発明するものが多くの死を引き起こすだろうということを少しも考慮していなかったのだらうと疑わしく思う
- a 自動車を発明した人たちは自分たちが生み出そうとしているものについてはっきりと理解していなかったと強く信じる。
- b 自動車は大気汚染や地球温暖化について考慮しながら発明されたのかな、と思う。
- c 自動車を発明した人たちは多くの人が自動車事故で亡くなるかもしれないという可能性について大変気にかけていたことは間違いない。

D. 本文中の下線部の意味を選ぶ問題。

(あ) some 25 million people

**some** の用法に注意!

**some** + 複数形 : いくつかの~

**some** + 可算名詞単数形 : ある~

**some** + 不可算名詞 : いくらかの~・何らかの~

**some** + 数詞 : およそ~ (= **about** ~)      なので、c 約 2500 万人

(い) three and a half times as many vehicles

倍数表現の基本      **times as ~ as ...** : ...の 倍~だ

**three and a half** は「3と半分」3.5を表す      なので、b 3.5 倍の数の車

1896年8月17日、44歳のブリジット・ドリスコールは自動車事故で亡くなった最初の人物となった。ドリスコール夫人はダンス発表会を見るために10代の娘と一緒にロンドンに向かっている途中だった。水晶宮のちょうど外側で、彼女は一般向けにデモンストレーション走行をしていた自動車に轢かれたのだ。A-(i)その自動車はドリスコール夫人とぶつかったとき、時速4マイルで走っており、その衝撃は致命的だと判明した。ある目撃者はこう証言する。「このようなことは二度と起こらないにちがいない」

しかし、それは起こってしまった。そのとき以来、およそ2,500万もの人々が路上の交通事故で亡くなっているのだ。A-(ii)アメリカでは1960年までに、年間4万人近くの人々が路上で亡くなっている。現在、3.5倍もの数の車が走っているのだが、事故死者の数はさほど変わってはいない。現在もっとも交通事故にあっているのは世界の貧困層の人々である。毎年の路上での事故死の7割は発展途上国で発生しており、そこで路上の事故で負傷したり死亡したりする人々の大多数は自動車を所有していない人たちである。彼らは歩いているか、自転車に乗っている人たちなのだ。低所得層、中流所得層の国々の一部では、自動車事故の犠牲者は全入院患者の1割にも及ぶ。対照的に、先進諸国では、路上を走る車の数はたいへん増えているにもかかわらず、死亡者数は減少しつつあるように思われる。

では、その相違点とは何だろうか。裕福な国で運転する場合、そこで乗るのはより新型の自動車であり、法律によって安全点検が定められているのである。その車には例えばエアバッグだとかアンチロックブレーキといった安全対策が数多く講じられていることだろう。道路はよく整備されていることであろうし、飲酒運転や携帯電話で通話しながらの運転を禁じる厳しい法制度もあることだろう。しかし、一部の発展途上国では検定に合格することすらなく運転する人が多くいるのである。これらの国々では路上を走る自動車の台数は飛躍的に伸びているのだが、狭く整備されてない道路事情はこのような急激な運転者の増加に追いついていけないのだ。事故が起これば、救急車が到着するまでに長くかかるだろう。たとえ救急車が間に合ったとしても、医療費は信じられないほど高額である。

おそらく、交通事故死にまつわるもっとも悲しい側面は喪失感である。ネルソン・マンデラは長男が交通事故で亡くなったという知らせを受けたときに抱いた喪失感について、こう記している。「私は自分の感じている悲しみ、喪失感を表現しうる言葉を持ち合わせない。それは私の心に決して埋め合わせることのできない穴を開けてしまった」マンデラ氏の言葉を聞くと、自動車の発明者たちは自分たちがこの世界に解き放とうとしているものについて考慮していたのかどうか疑わしく思わざるを得ない。

[ ] 空所補充・部分和訳

A. 前後の文をつなぐ副詞表現を選ぶ問題。

(あ) 空所の前には「全員で協力することが重要」、後ろには「全員の調和と意見の一致が必要」とある。

- b したがって  
a しかし            c 偶然に            d それにもかかわらず

(い) 空所の後ろは「謙虚さと控えめな態度が必要」。指導者の資質の中で特に必要なものを述べている。

- a とりわけ  
b しかし            c ところで            d つまり

(う) 空所の前には「できない上司でも追い出さない」、後ろには「(追い出さずに)自分からやめるように後押しする」とある。

- b そのかわりに  
a それにもかかわらず            c その結果            d つまり・要約すれば

B. 部分和訳問題。

本文は “confronting others openly in order to get one’s own way was discouraged.”

文末の “was discouraged.” が文の動詞(受身)になっていることから、この前全体が「でかい主語のカタマリ」ということになる。openly と in order to ~ とは修飾語なので「他人ともめること」が主語。in order to の後ろにある get one’s own way は「自分の思い通りにする」という重要な表現(これは have one’s own way としても同じ)。なので、c か d に絞られる。

discourage は「Oを落胆させる/Oを思いとどまらせる」の意味。下線部の前に「共同体全体の調和と意見の一致が最優先事項」とあるので、cを選ぶと「やってはいけないこと」というつながりができる。

C. 文脈把握問題。

これはことわざの英語表現について知識を問う問題ではなく、「この流れにぴったりとあてはまることわざはどれですか」という問題。

ここでは「指導者であっても謙虚でひかえめであること」を表すことのできるものを選べばよろし。

c

D. 空所補充問題。

「日本企業は、[ ア ] のビジネス界では一般的なトップダウン型よりもむしろボトムアップ型の経営方針を採る。」のところなので「日本ではないところ」を選ぶ。

d

E. 空所補充問題。

「伝統的に[ イ ]と言われるこの過程を通じて~」のところ。

「この過程」とは前文にある「直属の上司と非公式に話し合う」こと。談合でも本音でも建前でもない。

d 根回し

日本社会では、年齢や社会的地位にかかわらず慎ましかで控えめであることが求められる。もっとも好かれないのは積極的で自己主張する人物や、自分の能力、知識、富をひけらかす人物である。

日本社会は農耕社会から発展して来た。そのような社会では、集団で働き、共同作業のしくみを確立することが必要であった。したがって、共同体全体の調和と意見の一致が最優先事項であり、自分の思い通りにしようと他人とおおっぴらに対決することはすすめられるものではなかった。責任ある立場にあるものでさえ、自分の意志を通すのではなく、あらゆる決定によって影響を受けるであろう全員の総意をまとめることを求められる。

とりわけ、謙虚であることと控えめであることが指導者に求められる資質である。「実るほど頭をたれる稲穂かな」ということわざにあるとおりなのだ。したがって、日本企業は、西洋のビジネス界では一般的なトップダウン型よりもむしろボトムアップ型の経営方針を採る。意思決定の過程は次のようになる。責任者が部下の作った元の計画を採りあげ、管理職から経営者へ、さらに総支配人へと、社内での直属の上司と非公式に話し合う。古くから「根回し」と言われるこの過程を通じて計画は改訂され、正式な検討会議にかけられるときにはすでに関係者全員にとって納得のいくものになっているのだ。

このやり方の背後には全体としての荣誉が重要であり、尊重されなければならないという前提がある。例えば指導的立場にある上司が必要とされる指導者としての資質を欠いているときでさえ、周りのものはその人を追い出したりはしない。そのかわり、面目をつぶすことなく自分で辞職を決めるよう後押しするのである。